

一心寺かわら版

第十六号 平成二十一年三月発行

「食育」のいのちの食べかた」

数年前から「食育」ということが盛んに言われるようになり、(財)食生活情報サービスセンターによると、「食育とは、国民一人一人が、生涯を通じた健全な食生活の実現、食文化の継承、健康の確保等が図れるよう、自らの食について考える習慣や食に関する様々な知識と食を選択する判断力を楽しく身に付けるための学習等の取組みを指します。」とあります。また「食育」ということばは、一八九八(明治三十一)年に、石塚左玄が『通俗食物養生法』の中で「今日、学童をもつ人は、体育も智育も才育もすべて食育にあると認識すべき」と表現しているのが始まりだそうです。

「食育」は長い間、どの家庭でも子育てとしつけの基本であったものが、第二次世界大戦後から高度経済成長期、バブル経済期に至る日本の食生活が大きく変化した時代を経て、一九九〇年代に入るまでは、あまり大切にされていませんでした。しかし、一九九〇年代後半になると、食は健康の源であり、身体に必要で安全なものを選んで食べていくことは、生命のあり方に直結するという認識が高まってきました。食の安心や安全が求められる時代となつて「食育」の大切さが見直されてきたようです。

しかし、右記だけでは「食育」の内容として不足だと思えます。

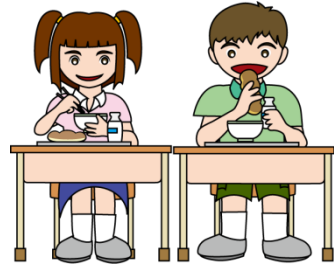
「いただきます」の心を伝えることが主眼となっていないからです。大分前になりますが「給食費を払っているのだから、いただきますと言う必要はない」と申し入れた母親がいたそうで、「いただきます」がなくなった学校もあると聞きました。お金を払っているから必要ないと考える人がいること、また、手を合わせて「いただきます」というのは宗教的だから拒否するという意見もあったそうで、大きな驚きでした。



そもそも「いただきます」とはどういうことでしょうか。「お百姓さんがお米を作り、漁師さんがお魚を捕ってきてくれて、他にも多くの人の手がかかってこの食事ができる、そのことに感謝するのよ」という趣旨の説明を聞きました。それは「ごちそうさま」の意味としては適当かもしれませんが、「いただきます」としては説明不足であり、もっと大切な心が込められています。それは「いのちをいただきます」ということです。いつの時代でも、どの国でも、誰にでも共通の事実であるはずで

東京都足立区の小中学校の給食の残飯は一日に約三トンだそうです。その足立区では給食時間を五分間延長する試みをし、三、四%、約百キロ食べ残しが減ったそうです。それまでは、準備や後片付けの時間を除いた実際の食事時間は約十五分と大変短く、おろそかにされていたようです。

私がか子供の頃は、食べ残しがあつたら、給食後の授業にも机上に食器が残され、食べ切るか、放課後に給食センターの車が来るまで居残りさせられました。残念ながら私には好き嫌い（特にきゅうりの酢の物）があつたので何度となく経験しました。それは、さまざまな食物の栄養を、取ることが体に大切だということ、多くの方の苦労があつて食事ができること、そして、いのちあるものを私が生きるための糧として、いることへの自覚を促すためだったのでしよう。現在の給食風景はどうなのでしょう。



あるコンビニエンスストアチェーンでは、各店個別の値引き販売が禁止されているそうです。ある店長は「ひと月に七十万円分の廃棄食品が出るが、大変もつたないことであり、経営を圧迫している。本部の指導で値引き販売ができないのだが、それを無視して賞味期限切れが間近なものを安売りするようにしたら、廃棄がひと月に三十万円分になった。」と語ります。私は学生時代にコンビニでアルバイトをしていました。そこで出た賞味期限切れ食品は、持って帰ることはできなかったものの、店長のはからいにより、その場でいただくことができました。ひとり暮らしの学生としては助かりましたが、たくさん捨てられることを目の当たりにして、本当にもつたないと思いました。この指導をしている企業はいのちの大切さを考えていないのでしょうか。もしかしたら日本社会全体がそうなつていたのかもしれない。

以前、講演をお聞きした森達也氏の著作『いのちの食べかた』にはさまざまないのちの現実が書かれてあります。日本人が一年間に食べる牛と豚と鶏の肉の総量は二、九九三、六三一トン（二〇〇四年）だそうです。重さでは想像もつきませんが、牛は一、二六七、六〇二頭、豚が一六、一八三、四九五頭だそうです。単純に日本の人口で割ると一人当たり約二四キログラム、牛は百人に一頭、豚は十人に一頭です。

有名な仏教説話に、「鷹とシビ王」の物語があります。

昔、インドにシビ王という、大変情け深い王様がいました。ある日のこと、王様がお城の庭を歩いていると、鷹に命を狙われた一羽の鳩が、助けを求めて懐に飛び込んできました。王様は鳩を哀れに思い助けようとしたが、今度は鷹が王様に向かって、何日も飲まず食わずでやつと見つけた獲物の鳩を奪われてしまえば、自分は飢えて死んでしまう、と鳩の引き渡しを願ったのでした。王様は、この二つの命を助ける為に、自分の体の肉を鳩の重さと同じだけ鷹に与える約束をしました。けれど、どんなに肉を切り取って量っても、不思議なことに鳩の重さとは同じにならず、王様は、遂に自分の体をすべて鷹に捧げること、この二つの命を救った、というお話です。

このシビ王が秤にかけたのは、肉の重さではなく「いのち」の重さだったのでしよう。自分の「いのち」も、友だちの「いのち」も、そして他のありとあらゆる「いのち」も、その尊さ重さに変わりではなく、決して天秤にかけられるものではないのです。

森氏は「宮澤賢治が書いた童話『よだかの星』は知っているかい？もし知らなければぜひ読んでほしい。よだかはとても醜い鳥だった。夜に飛ぶことと、たくさんの虫を飛びながら食べることで、ほかの鳥たちから気味悪がられ、いつも嘲笑されていた。でもよだかは、実はとても心優しい鳥だった。生きるためにたくさんの虫を食べなくてはいけない自分の運命に悩み、心を痛め、ついには自分の命と引き換えに、夜空の星になる話だ。星になれない僕らはどうすべきか。知ることだと僕は思う。知ってそのうえで、生きてゆくしかない。それはとてもつらいことだ。でもつらいからといって目をそむけてはいけない。牛や豚がと場で殺される理由は、僕らが食べるからだ。ところが僕らは彼らの哀しみを知らない。見て見ないふりをしてきたのだから。知らないのだから。だから平気で肉を残す。残した肉はゴミ箱に捨てられる。でも、彼らを殺す役目を引き受けた職人たちは、肉の一切れでもむだにはしたくないとばかりに、汗をかきながら懸命にナイフを振るう。いのちを食べるからこそ、いのちをむだにはしないことを、彼らは知っている。」と記しています。

(絵：一九九九年のよだかの星』のアニメの一場面)



ある学校では、生徒が自分たちで育てた豚を殺して、給食に出すという「いのちの教育」をしているといいます。子供にとっては残酷であるという意見もあり、賛否両論あるそうです。

森氏が撮影したドキュメンタリー『一九九九年のよだかの星』では、動物実験の現実が伝えられています。その中で動物実験をする研究者を通して「朝起きてから寝るまでに私たち人間がすること動物実験が関わっていないものはほとんどない」と語ります。

前著には「世の中に流通するほとんどの商品には、化学物質が含まれている。風邪を引いたときに飲む風邪薬やお腹の薬も、化粧品もシャンプーも、歯磨き粉や、ガムや飴などのお菓子、多くの食品や化学繊維を材料にしたほとんどの衣服も、家の材料になる建材も、この動物実験で安全性が証明されないかぎりは、認可は下りない仕組みになっている。」とあります。

私は、食べる以外にも、想像できないほど多くのいのちを犠牲にしていると知り、人間の業の深さを痛感せざるを得ませんでした。地球上の生物は分かっているだけで百七十五万種に上るそうです。しかし、今から化学物質を使わない生活に戻れるかと言えば、無理でしょう。少しでもその事実を知って、いのちの犠牲を減らす努力をしつつ、慚愧と感謝の気持ちで手を合わすしかない、としか言えません。

最後にもう一つ森氏のことばを。

「世界には数えきれない「誰か」がいる。その「誰か」がいるから、僕たちの生活は続いている」

その「誰か」、「何か」が分からなくとも、その存在を感じて手が合わさっていくのが仏教でしょう。先人は「仏教は本当の人間になる教え」とも伝えます。いのちの「間」で生かされている「人」

の事実を目を向けて、合掌。「いただきます」・「南無阿弥陀仏」



森達也氏：映画監督／ドキュメンタリー作家、一九五六年広島生まれ。一九九八年オウム真理教の荒木浩を主人公とするドキュメンタリー映画「A」を、二〇〇一年には続編「A2」を公開するなど精力的に活躍。著書『いのちの食べ方』（理論社YA新書）、『死刑』（朝日出版社）など多数。

真宗のことば②「往生」

めぐちゃん 「ワイイ、今日はお出かけうれしいなあ」

父さん 「あくあ、この渋滞には、往生するなあ」

めぐちゃん 「オージョーってなあに？」

父さん 「オージョーっていうのは、こまった時や行きづまった時に、

よく言うんだよ」

めぐちゃん 「どんな字を書くの？」

母さん 「往復の「往」に、お誕生日の「生」よ」

父さん 「そうそう、「往く」「生まれる」って書くんだよ」

めぐちゃん 「へーえ、往く、生まれるって書いてこまった時に使うんだ」

じいちゃん 「いやいや、往生というのは、お浄土に生まれることじゃよ」

めぐちゃん 「オジョードって？」

ばあちゃん 「極楽とも言うわよ」

父さん 「はあく♪ ゴクラク、ゴクラク」ってね」

めぐちゃん 「お風呂でも言ってるね。なんだか楽しそうところね」

じいちゃん 「はははは。お浄土は仏さまの世界じゃよ。阿弥陀さまとい

う名前なの」

ばあちゃん 「いつか、おばあちゃんもめぐちゃんも、お浄土に生まれて、

仏さまに成るのよ」

めぐちゃん 「ふーん。じゃあ、いつ仏さまに成れるの？」

父さん 「そりゃあ、死んでからだろ?!」

めぐちゃん 「じゃあ、私にはまだ関係ないじゃん」

じいちゃん 「確にお浄土に生まれて仏さまに成るのは、いのちが終わ

る時じゃよ。でも、「必ず仏にさせたい」という阿弥陀さま

の願いは、めぐちゃんにいま、届いているんじゃないよ」

ばあちゃん 「そうね、それをいただいているから、お浄土に生まれさせ

てもらうのね」

めぐちゃん 「ただ死ぬんじゃないんだ、生まれていくんだあ」

父さん 「この渋滞は、まだまだかかりそうだなあ」

かあさん 「そうね、でも必ず着くんだから焦らずいきましょ」

私たちにとって大事なことは、この人生において如来のはたらきをうけいれること、つまり、信心を得て念仏する身にならせていただくことです。それはそのまま往生する身とならせていただくことなのです。

阿弥陀如来の本願に気づいた人は、それぞれの人生を大切に歩むことができます。
(本願寺パンフレットより抜粋)